
遊戯王～魔導の力を持つもの～

K太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王～魔導の力を持つもの～

【NZコード】

N7485Z

【作者名】

K太

【あらすじ】

突然遊戯王の世界に行く主人公、上田悠希。テンプレかと思ひきや？笑いあり？涙あり？ラブコメあり？の遊戯王世界。悠希は生き延びられるか。

オリキャラ多数登場予定。オリキャラが使うのは作者と友達のティックをベースにしています。

また作者のデュエルタクティクスは低いです。お気をつけください。
(過去にリクルーターに魔法の筒を使いました)
シンク口は2話から。エクシーズ未定

入学試験（前書き）

書きたくなつたので1話だけ書いて見ました。
こんなんで良ければ読んでください。

入学試験

澄み渡る空と心地よい風。

俺はぽかぽかの日和の中を

ダダダツダニアアアアアアア

走っていた。「遅刻だあああああーー」とか言つ余裕も余裕もなく。かなり前を走るのは見覚えのある背中。あいつは確か遅刻してぎりぎりだつたはず。・・・それより遅い俺、アウト！？
いや、まだ大丈夫なはずだ。

とか心の中で祈つていたら目的地が見えてきた。

デエエルアカデミア入学試験会場海馬ドーム。

十代が駆け込んでいくのが見えたからまだ大丈夫なはず。
「すいませーん！まだいます！」受験番号9番上田優希、電車のトランプで遅れました！！」受験票を掲げながら声を上げる。
間に合つた、よね？

「スカイクレイパー シュート！…
「マンマミーヤ！？」

十代は原作どうりクロノス先生に勝利を収めた。
俺？この後だつてさ。絶対相手クロノス先生だよなこれ。
・・・デツキいじりたいな。マジック・シンダー 魔法の筒抜いたりぞ。
まあ昨日じつくりいじつたから今更やつてもな。
「受験番号9番上田優希、デエエルリングに上がりなさい」
呼ばれました、つと。

リングへあがるために歩を進める。すると降りてくる十代とすれ違つた。

「おっ、今からか？がんばれよ！」

「ああ、あんなの見せられたら燃えないわけにはいかないじゃないか」

「へへまあな」

軽口をかわしながら上に上がる。

対面には不機嫌そうなクロノス先生。

「上田優希、これから実技試験を始めるノーネ（今度こそ勝つて汚名返上するノーネ）」「（とか考えてるよ、あの顔は絶対）よろしくお願ひします

「『テラヘル』」

「先攻は譲るノーネ」

「では、おれのターン、ドロー」

手札はまずまずだな。

「『王立魔法図書館』を守備表示で召喚」

『王立魔法図書館』

ATK／0 DEF／2000

地面から競り上がりリングを囲むよつて出て来る巨大な建造物。フィールド魔法じゃないよ？

「魔法カード『テラ・フォーミング』を発動。デッキからフィールド魔法を手札に加える。『魔法都市エンティミオン』を手札に加える。さらに魔法カードが発動したため『王立魔法図書館』に魔力力ウンターを一つ載せる」

虚空に一つ青白い光球が浮かぶ。

「そしてフィールド魔法『魔法都市エンティミオン』を発動。魔法

カードの発動により『王立魔法図書館』に魔力カウンターが一つの
る

図書館の周りが緑の多い都市に変わる。変わってる、はず。窓から
きものからしか見えないけど・・・。

さらにもう一つ光球が浮かぶ。

「続いて魔法カード『おろかな埋葬』発動。デッキからモンスター
を一体選択して墓地に送る。俺はデッキから『神聖魔導王エンディ
ミオン』を墓地に送る。魔法カードの発動で『王立魔法図書館』と
『魔法都市エンディミオン』に魔力カウンターがのる」

虚空に青白い光球と少し緑がかつた光球が浮かぶ。

そこで周りからバカにしたような笑い声。

「モンスターを墓地に送る?」「何考えてるんだ?」「何も考えて
なんかいないんだろ?」「バカだろ」

言いたい放題だな。まあ後であつと言わせてやるさ。

「『王立魔法図書館』の効果、このカードに乗っている魔力カウン
ターを3つ取り除くことでデッキからカードを1枚ドローする、ド
ロー」

ドローしたカードは・・・よしつ。

「カードを2枚伏せて、ターンエンド」

そして後攻クロノス先生のターン。

「私のターンドロー。カードを2枚伏せて、」ちょこれつてまさか
!?

「魔法カード『大嵐』を発動するノーネ!」

早い早いって!

「くつそ、チヨーンして速攻魔法『ダブルサイクロン』を発動!さ
らにチヨーンして罠カード『漆黒のパワーストーン』発動!」
ギャラリーが目を丸くする。

「効果処理に入ります。まず『漆黒のパワーストーン』の効果、こ
のカードに魔力カウンターを3つ乗せます。そして『ダブルサイク
ロン』の効果、自分と相手のフィールドの魔法罠カードを1枚づつ

選択しそのカードを破壊する。俺は『漆黒のパワーストーン』と右側の伏せカードを破壊！

まあ破壊自体は意味ないけどね・・・。

「罠カードは不発だつたようなノーネ。そして『大嵐』の効果で残つたフィールド魔法は破壊させて貰うノーネ！」

「『魔法都市エンディミオン』の効果！このカードが破壊されるとき、このカードに乗る魔力カウンターを1つ変わりに取り除く。これでエンディミオンは破壊されない！」

緑の光球が弾け消える。

「魔法カードが発動したことで『王立魔法図書館』と『魔法都市エンディミオン』に魔力カウンターを乗せる。2枚発動したので2つづつ乗せる。そしてエンディミオンは魔力カウンターが乗つたカードが破壊されたとき、そのカードに乗つっていた魔力カウンターと同じ数の魔力カウンターを乗せる。『漆黒のパワーストーン』の3つを乗せる」

再び今度は緑の光球が5つ青白い光球が2つ浮かぶ。

「ふむ、しかし私が伏せていたカードは『黄金の邪神像』。邪神トークンを2体特殊召喚！そしてこの2体を生贊に『古代の機械巨人』を召喚！」

『古代の機械巨人』

ATK／3000 DEF／3000

やつぱりか！やつぱお前か！

『古代の機械巨人』は貫通効果を持っているノーネ。『古代の機械巨人』で『王立魔法図書館』を攻撃。アルティメットパーウンド

正面の壁を殴り付ける『古代の機械巨人』

LP 4000 3000

「くつ」

『王立魔法図書館』は破壊され視界には魔法都市が広がった。

『『王立魔法図書館』の魔力カウンターをエンディミオンに乗せ変える』

色が変わり緑になる光球。

「私はこのままターンエンド」

「俺のターン、ドロー！」

魔力カウンターは7。 いける！

「おれは『魔法都市エンディミオン』の魔力カウンターを6つ取り除き、墓地からこのモンスターを特殊召喚する。 降り立て、魔術師を統べる王よ！」 神聖魔導王エンディミオン』！』

6つの光球がぶつかり合い魔法陣を形成する。 そこから降り立つよう1人の魔術師が現れる。

『神聖魔導王エンディミオン』

ATK / 2700 DEF / 1700

7

「何をするかと思えば攻撃力は2700。 『アンティーグーゴーレム古代の機械巨人』を倒すことはできないノーネ！」

「攻撃力だけでモンスターを見ていたら、足元すくわれますよ。 『神聖魔導王エンディミオン』の効果！ 自らの効果でこのカードを特殊召喚したとき墓地の魔法カードを1枚手札に加える」 ん~、何でも良いんだけどどうしよう？ これでいいか。

『『テラ・フォーミング』を手札に加える』

そしてまた会場の所々で嘲笑の声が聞こえる。

「何してんだ？」 「フィールド魔法ならもうあるだろうが」「やつぱりバカだな」

バカはどうちだ。 クロノス先生含め何人かは、まだなにがあると確信してゐるのに。

「さらに『神聖魔導王エンディミオン』の効果、手札の魔法カードを1枚捨てることで相手フィールド上のカードを1枚破壊する！』

テラ・フォーミング』を捨て『古代の機械巨人』を破壊する！『ディバイン・ゼロ！！』

足元にできた魔法陣に飲み込まれ消える『古代の機械巨人』。

「よしつ、『神聖魔導王エンティミオン』でダイレクトアタック。スニーグヴェルグ！！」

白い魔力砲がクロノス先生にぶつかる。

L P 4 0 0 0 1 3 0 0

「ぬおー！？」

「カードを1枚セットしてターンエンド」
よしつこれで形勢逆転。このまま押し切る。

「少し甘く見ていたノーネ。私のターン、ドロー」

「スタンバイフェイズ時、罠カード『バベル・タワー』を発動！」
リングの横に頂上の見えないほど巨大な塔がそびえ立つ。

「このカードは、自分または相手が魔法カードを発動する度に、このカードに魔力カウンターを1個乗せる。そして、4個目の魔力カウンターが乗った時にこのカードを破壊し、その時魔法カードを発動したプレイヤーに3000ポイントのダメージを与える」

これを聞いたクロノス先生は少し苦い顔になる。

「（これは魔法カードを封じられたも同然なノーネ。しかし、まだカウンターは乗っていないので気にする必要はないノーネ）私は『トロイホース』を守備表示で召喚し、カードを1枚伏せターンエンド」
『トロイホース』

A T K / 1 6 0 0 D E F 1 2 0 0

魔法を発動しないことを見ると、今のところ手札にはないかそう思われているか。まあ、やることは変わんないけどね。

「俺のターン、ドロー」
よしつ来たぜ。

「魔法カード『魔力掌握』を発動。この効果により『バベル・タワー』に魔力カウンターを1つ乗せる。その後デッキから『魔力掌握』

を手札に加える。そして『魔法カードの発動によつて『魔法都市エンディミオン』と『バベル・タワー』に魔力カウンターを乗せる』

トロイホースを残したらきつとあいつが来る。ここで破壊する！

「『神聖魔導王エンディミオン』で『トロイホース』を攻撃。スニーグヴェルグ！」

「罠発動『聖なるバリア・ミラー・フォース』！攻撃表示のモンスターを全て破壊するノーネ…！」

「つちよ！？ やば！？」

これで俺の場のモンスターは0。ピンチ！

「モンスターセット、カードを一枚伏せてターンエンド」

くつそれしかない！

「私のターン、ドロー。『トロイホース』は地属性モンスターを生贊召喚するとき2体分の生贊にことができるノーネ。『トロイホース』を生贊に『古代の機械巨人』を召喚！」

『^{アンティーグ・ゴーレム}古代の機械巨人』

ATK / 3000 DEF / 3000

再びお前かーーー！！

「『^{アンティーグ・ゴーレム}古代の機械巨人』でセットモンスターに攻撃！アルティメットパウンド！」

モンスターが姿を現し破壊される。

『見習い魔術師』

ATK / 400 DEF / 800

「おお！？」

LP 3000 800

ライフが大きく削られ3桁になる。

『見習い魔術師』の効果、戦闘で破壊されたとき『ツキからレベ

ル2以下の魔法使い族モンスターをセットする。『執念深き老魔術師』をセット！

これで次のターン仕留める！

「メインフェイズ2へ移行、魔法カード『強欲な壺』を発動。デッキからカードを2枚ドローするノーネ」

あ（；）。まじで？

「えっと・・・、チエーンして速攻魔法『魔導書整理』を発動。デッキの上からカードを3枚めぐり好きな順番にしてデッキトップに戻す。チエーン処理に入ります『魔導書整理』の効果が適用されます。3枚めぐりこのままデッキトップへ」

会場全体が「ゑ？」ってなる。二沢辺り気付いてると思うんだが。「そして先生の『強欲な壺』の効果で先生は2枚ドローします」「ではドロー。一体セニヨールは何がしたいのデスーカ？」

したいというか、なつちやつたというか。

「魔法カードの発動で『魔法都市エンティミオン』と『バベル・タワー』に魔力カウンターが乗ります」

「これでセニヨールがダメージを受けて終わりになってしまいますよ？」

クロノス先生の言葉を聞いて笑い出す奴と呆れる奴に分かれ。笑つてる奴は本当学習しねえなあ。

「チエーン処理により先に俺のカードが発動し、その後クロノス先生のカードが発動した。よつてこの順番でカウンターが乗る」

「――ゑ？」

「『バベル・タワー』に4つの魔力カウンターが乗ったのでこのカードは破壊され、その時魔法カードを発動したクロノス先生に3000のダメージを与える」

赤の光球が弾け塔が崩壊する。その瓦礫の殆どがクロノス先生に降りそそつた。

「マジマジマジヤー……」

「アーモード 〇

シ――――――ン

何とも微妙な感じで勝利してしまった。。

決闘の後、直ぐに会場を後にした俺。

先生（クロノス先生ではない）の話によると、結果は後日と云つてからといふが勝利したなら合格は間違いないとか。

今はホテルに向かってるところだ。俺の保護者の家はここからだとかなり遠いのでビジネスホテルに泊まる予定。
そういうえばまだ言ってないけど、わかってるか。俺は異世界から來ました、以上。

宿を探そうと市街地を田指していると、

「おー」

声をかけられた。

「ん？」

振り返り声の方を見る。

「テュエルしるよ」

入学試験（後書き）

悠希「今日の最強カードは・・・『バベル・タワー』・・・?
? 「魔力カウンターで擬似的な魔法ロックがかけられるし、ライ
フ4000で3000のダメージは強力ね。また自壊するときも力
ウンターは乗つたままなのでエンディミオンに乗せ変えることも可
能」

悠希「ただ自分も魔法が使いづらくなるから注意が必要だ。2~3
カウンターが乗つたらサイクロン等で破壊するのも手だな」
? ? 「それよか、悠希って女の子みたいな名前だけど結構どっちな
の?」

悠希「えー・・・」

エースなのに最強カードでないエンディミオン哀れ。

今回実は悠希プレイミスをしてます。それがなければもう少し
まともに勝利してました。

さて2話はこれから書きます。しばしかかりますが、読んでいただ
けるならお願ひします m(—)m

おい、トコホルしるよ（前書き）

思つたよつ早くできました。第2話です。
ついにシンクロ登場！

あとオリカあります。

おい、デュエルしろよ

「デュエルしろよ」

いきなりデュエルを申し込まれました。何言ってんのこの娘？なにデュエルディスク構えてるの？」の台詞つてあれだよな。これもしかして……試してみるか。

「なんだよいきなり。カードはどうしたんだよ？」

「イ、と笑って聞く。少女もわかつたようでニヤリッと笑った。

「カードは拾つた」

確定だなこりや。黙つてデュエルディスクを構える。

「「デュエル！」」

「レディーファーストだ、先攻は譲る」

「なら遠慮なく、ドロー！モンスターをセット、カードを2枚伏せてターンエンド」

初手とすれば手堅いな。伏せ2枚なら1つはグラフか。

「俺のターン、ドロー」

強気で攻めるか！

「『魔導戦士ブレイカー』を召喚！」

魔導戦士ブレイカー

ATK／1600 DEF／1000

「ブレイカーが召喚に成功したとき、このカードに魔力カウンターを1つ乗せる。そして攻撃力を300ポイントアップする！」

ATK / 1600 1900

「そして魔力カウンターを1つ取り除くことで、魔法罠カードを破壊する。右側のカードを破壊。マナ・ブレイク！」

破壊したカードは『聖なるバリア・ミラーフォース』。おk

「ブレイカーで伏せモンスターを攻撃！」

攻撃を受け現るのは小さなネズミ。

「『ボルト・ヘッジホッグ』か・・・。カードを一枚伏せターンエンド」

「あたしのターン、ドロー！『グローアップ・バルブ』を召喚。自分フィールド上にチューナーモンスターが存在するとき『ボルト・ヘッジホッグ』は墓地から特殊召喚できる。そして墓地からモンスターの特殊召喚に成功したとき手札から『ドッペル・ウォリアー』を特殊召喚！」

場に並ぶ3体のモンスター、合計レベルは5・・・。

「レベル2の『ボルト・ヘッジホッグ』『ドッペル・ウォリアー』にレベル1『グローアップ・バルブ』をチューニング！集いし英知の塊が新たな魔法を紡ぎ出す、未来を導く力となれ！シンクロ召喚！来て『TG ハイパー・ライブラリアン』！！」

TG ハイパー・ライブラリアン

ATK / 2400 DEF / 1800

光の環から現れる未来の魔法使い。レベル5の魔法使い族としては高い攻撃力と脅威のドロー効果を持つモンスター。

「さらに、『ドッペル・ウォリアー』がシンクロ素材として墓地に送られたとき『ドッペル・トークン』を2体特殊召喚できる！続いて、手札から『ワンドショット・ブースター』を特殊召喚。最後にデ

ツキトップを墓地に送り、『グローアップ・バルブ』を墓地から特殊召喚！

さらに展開して来たか。レベルは4。

「レベル1『ドッペル・トーケン』2体と『ワニショット・ブースター』にレベル1の『グローアップ・バルブ』をチューニング！集いし光が力を与える武器となる、未来を導く力となれ！シンクロ素材！お願い『アームズ・エイド』！！」

手の形をしたモンスターが現れる。

「1ターンに2体のシンクロモンスターか、やるな」

「ふふん ライブラリアンの効果、このカードがフィールドに存在するときシンクロ召喚に成功した場合、デッキからカードを1枚ドローする。そして『アームズ・エイド』をライブラリアンに装備！攻撃力を1000アップする」

ATK / 2400 3400

「ライブラリアンでブレイカーを攻撃！ブレイクマジック！－」

為す術も無く破壊されるブレイカー。

「罠カード『ガード・ブロック』を発動。戦闘でのダメージを0にしてカードを1枚ドローする！」

「でも『アームズ・エイド』の効果が発動する。戦闘で破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを与える！－」

LP 4000 2400

「くつ」

放たれた衝撃でダメージを受ける。あぶねえ、『ガード・ブロック』
なかつたら大ダメージ喰らつてた。

「カードを2枚伏せてターンエンドだよ」

「俺のターン、ドロー！」

よしつ、来てくれた！

「モンスターをセットして、魔法カード『太陽の書』を発動。今伏せたモンスターを表側攻撃表示に変更する。このカードは『闇靈使いダルク』！」

「ウソ！ 霊使い！？」

「リバース効果発動、相手フィールド上の闇属性モンスター1体のコントロールは得る。ライブラリアンのコントロールを得る！」
闇の魔術でこちらに移るライブラリアン。少女の場はこれでがら空きだ。

「バトル！ ライブラリアンでダイレクトアタック！」

「『『くず鉄のかかし』を発動！ 相手の攻撃を無効にして、再びこのカードをセットする」

「ならダルクでダイレクトアタック。闇の精霊術！」

L P 4 0 0 0 3 5 0 0

攻撃は通るものダメージは微々たるもの。

「メインフェイズ2へ移行。ダルクとライブラリアンを墓地に送り、『憑依装着 - ダルク』をデッキから特殊召喚」

憑依装着 - ダルク

A T K / 1 8 5 0 D E F / 1 5 0 0

ライブラリアンが黒い光球となりダルクを包み、少し姿を変えたダルクが現れる。

「この方法で召喚した場合貫通効果を得て、デッキからレベル3からレベル4の光属性魔法使い族モンスターを手札に加える。『サイレント・マジシャン』▼4を手札に加える。カードを1枚伏せ、『魔導師の力』をダルクに装備。魔法罠ゾーンのカード1枚につき攻撃力守備力を500アップする」

A T K / 1 8 5 0 2 8 5 0 D E F / 1 5 0 0 2 5 0 0

「ターンエンドだ

これでダルクは並のモンスターでは破壊されない。とは言え、あのタイプのデッキなら超える手段は少なくない。

「あたしのターン、ドロー。『ジャンク・シンクロン』を召喚。ジャンク・シンクロンが召喚に成功したとき、墓地からレベル2以下

のモンスターを特殊召喚する。『ドッペル・ウォリアー』を召喚…」
ほらな。

「レベル2の『ドッペル・ウォリアー』にレベル3の『ジャンク・シンクロン』をチューニング！集いし願いが闇を切り裂く力となる、未来を導く力となれ！シンクロ召喚！頼むわ『ジャンク・ウォリアー』！」

ジャンク・ウォリアー

ATK / 2300 DEF / 1300

「素材にしたドッペル・ウォリアーの効果、ドッペル・トーケンを2体召喚。そして『ジャンク・ウォリアー』の効果、自分フィールドに存在するレベル2以下のモンスターの攻撃力分このカードの攻撃力を上昇する。パワー・オブ・フェローズ！」

ATK / 2300 3100

「さらに罠カード『シンクロ・ストライク』を発動！シンクロモンスター1体を選択しエンドフェイズまで素材としたモンスター×500攻撃力をアップする！」

ATK / 3100 4100

ついには攻撃力が4000越えましたか。

「バトル！ジャンク・ウォリアーでダルクを攻撃。スクラップ・ファイスト！」

LP 2400 1150

さすがに4000越えは脅威だな。

「あたしはこのままターンエンド。攻撃力は3100に戻る」

ATK / 4100 3100

「俺のターン、ドロー。つ……！モンスターをセットしてターンエンド」

「まだまだいくよ！あたしのターン、ドロー！バトル！ジャンク・ウォリアーで伏せモンスターを攻撃、スクラップ・ファイスト！」

END

あつたり破壊されるモンスター、だが

「『執念深き老魔術師』のリバース効果、相手モンスター1体を破壊する！ジャンク・ウォリアーを破壊！」

「あつ！く、カードを一枚伏せてターンエンド」

なんとか破壊には成功。でもまだ劣勢だな。

「俺のターンドロー。まず伏せてあつた『リビングデッドの呼び声』を発動、闇靈使いダルクを墓地から召喚。手札から『見習い魔術師』を召喚。この2体を墓地に送り『憑依装着・ダルク』を『デッキから特殊召喚！効果は使わない。そして手札から『ダブルサイクロン』を発動。俺の場のリビデとそっちの場のくず鉄を破壊する」

自分の使わないカードを除去しつつ、相手の防御を外すことができた。

「バトル！ダルクでデッペル・トークンを攻撃。闇の精霊魔術！貫通ダメージを与える」

L P 3 5 0 0 2 0 5 0

「これでターンエンド」

「あたしのターンドロー！魔法カード『天からの宝札』を発動。互いのプレイヤーは手札が6枚になるようにカードをドローする」「ちよつそのカード！？」

アニメ効果じゃないか！最強のドローカードと名高い。

「何、・・・のことかな？」

「惚けんな！」

「まあそれはまた後で」

といつて彼女はドローした。俺もドローする

「この手札なら！『死者蘇生』を発動、『ジャンク・ウォリアー』を特殊召喚。そして手札からジャンク・シンクロロンを召喚」

レベルは8。デッキのエースと言えるモンスターが多く集中するインだ。

「レベル5『ジャンク・ウォリアー』にレベル3『ジャンク・シンクロロン』をチューング！集いし風が全てを包む翼となる、未来を

導く力となれ！シンクロ召喚！羽ばたけ、『スターダスト・ドラゴン』！」

スターダスト・ドラゴン

ATK／2500 DEF／2000

白い翼に光の粒子をなびかせるドラゴンが舞い降りる。

「スターダストか・・・」

「どうよ。これがわたしのエース！」

レベルの割に攻撃力は低いが強力な効果を持つドラゴン。元の世界ではほとんどのデッキに1枚は入ってるカード。

「スターダストでダルクを攻撃！・シュー・ティング・ソニック！」

LP1150 500

「うおっ！？」

ついに500以下、鉄壁と言われるところまできた。

「カードを伏せターンエンド」

相手のエンド宣言。俺のフィールドにカードはない。手札は多く状況を開拓する手段はあるが、勝利には一手足りない。そのカードを引く！

「俺のターン、ドロー！！」

・・・・・揃つた！

「『召喚僧サモンプリースト』を召喚！手札の魔法カードを1枚墓地に送り効果発動！デッキからレベル4のモンスターを特殊召喚する。『サイレント・マジシャンレベル4』を召喚。さらに速攻魔法『ディメンション・マジック』！自分フィールド上に魔法使い族モンスターがいるとき発動できる。自分の場のモンスター1体をリリースし手札から魔法使い族モンスター1体を特殊召喚する。サモンプリーストをリリースし、『ゲイシャドウ』を特殊召喚！その後相手フィールド上のモンスター1体を破壊することができます。スターダストを破壊！！」

「『スターダスト・ドラゴン』の効果！「フィールド上のカードを破壊する効果」を持つ魔法・罠・効果モンスターの効果が発動した時、このカードをリリースする事でその発動を無効にし破壊する！ヴィクテム・サンチュアリー！」

翼を広げるスターダストだがそのまま魔法の光にのまれ消える。

「ウソ！なんでスターダストが！？」

「『ディメンション・マジック』の効果は特殊で、効果解決時に破壊するか選択する効果だから「フィールド上のカードを破壊する効果」として扱わない！よつてスターダストで無効にすることはできない！！」

唚然とする少女にそう告げる。

「さらに魔法カード『マジシャンズ・クロス』！自分フィールド上に魔法使い族モンスターが表側攻撃表示で2体以上存在する場合、その内1体を選択して発動する。選択したモンスターの攻撃力はエンドフェイズ時まで3000になる。このターン、選択したモンスター以外の魔法使い族モンスターは攻撃をする事ができない。俺はゲイシャドウを選択！」

ATK / 1700 3000

「バトル！ゲイシャドウでダイレクトアタック！」

「罠カード『リビングデッド』の呼び声！「スターダストを復活！」これならスターダストを攻撃されてもライフは残る！」

再び舞い戻るスターダスト。確かにこれなら次のターンに繋げられる。俺の場のモンスターも攻撃力は高くない。逆転は十分可能だ。だが

「なるほど。でもな俺も奥の手は残してるのさ！」

手札に残ったカードを手に取り掲げる。

「速攻魔法『雷刃の導き』を発動！このカードは自分フィールド上に光属性魔法使い族モンスターが存在するとき、手札を1枚捨て魔法使い族モンスター1体を選択して発動する。選択したモンスター以外のモンスターはこのターン攻撃できず、選択したモンスターは

「このターン、直接攻撃をすることができる！！」

「なつ何そのカード！？あたしそんなカード知らない！」

「ゲイシャドウを選択して、ダイレクトアタック！」

「無視しないでよーー！」

「雷光一閃！！」

L P 2 0 5 0 0

「いやー、悠希君強いね。クロノス先生には勝っちゃうし、あたしもスターダスト出したのに負けちゃうし」

尻餅をついてたけど直ぐに起きて握手してきたよこの娘。

「君もかなり強いよ。久々にあんなに熱くなった」

「ありがとう。あたし、久藤香奈。よろしく

「よろしく久藤さん」

「香奈でいいよ。あたしも悠希君って呼ぶから」「リョーカイ」

薄々気付いてるけど本題に入る。

「にしてもいきなり「おい、デュエルしろよ」はないでしょ。知らなかつたらただの変な人だぞ」

「知らない人にいきなり「転生者ですか？」よりはいいと思わない？」

「それもそうか。でもよく俺がそ娘娘ってわかつたな
結構目立たないよにしたのに。」

「エンディミオンなんて使ってるしね。それに結構目を引くのに、元原作にはいなかつたから」

「ああ、そうか。シンクロじやなくともわかる人はカードでわかるの

か。

でも田を引くって?

「田を引くってどうこいつ?」

「ん? だつて、女の子みたいな顔と名前して格好と喋り方は男の子だもん。髪も男の子にしてはちょっと長いし。はつ、まさか俺つ娘男装女子! ? でもそつちのが納得できる! 」

香奈が顔を紅くして驚いていた。

そう俺の顔は女の子に近い。というか女の子にしか見えない。前は（自分で思つてるだけで）そんなでもなかつたが気付いたらこうなつてた。しかもかなりの美少女みたいになつていた。

指摘されたとき恥ずかしくていつそ坊主にしようとしたが、保護者に羽交い締めで止められ縛られた。話し合いの末にこの姿の（美少女としてかわいい）限界まで短くすることで妥協した。

だがこれでもショートヘアの美少女に見えるのだ。でもみんなこれ以上は絶対に許さないので、服なんかだけでもと男の格好（をしている美少女に見える格好）にしている。服のセンスなんかないでの選んでもらつたが・・・。

油断してると男の娘とか言われる所以、言葉は完全に男のものにしている。

あえて言おう!俺は男の娘ではないと!

しかし男装女子とは・・・ついに女の子じゃねえか!

「いや俺は男だから! 男装じゃねえ! 」

「ウソでしょ! 本当は悠希ちゃんだったりするんでしょ! 百合何でしょ! 」

「んな訳あるか――――――! 」

結局30分かけて俺が男であると納得させた。今は2人並んで状況確認をしながら歩いてる。

「で香奈も元の世界から来たってことか?」

「うん。神様に「お前は遊戯王の世界に行つてももう一」とか言わ
れてね」

「神様?」

「悠希は違うの?」

「おれは突然光に包まれて気付いたらここにいた」

「へえー」

神様か、そんなの見て無いな。それと呼び捨てになつてるのは互いに「もうこいつ呼び捨てでいいだろ」となつた(香奈はこれなら女子でも不自然じゃない)からだ。

「でもさつきの速攻魔法何なの?あたし知らないんだけど」

「アニメ効果とシンク口を全力で使つた人に言われたくないな」「GX時代にシンク口つてロマンじやん」

「ロマンでスターダスト出すなよ、未来変わつたらどうする気だ」

「む~。それよりこのあとどうすんの?どこ行くの?..」

「ここからだと保護者の家はかなり遠いからビジネスホテルだ。香奈も自分の家に帰れよ」

すると香奈は足を止めて俯いてしまう。

「?どうしたんだよ」

「・・・・・・ないの」

「ん?」

「わからないの。ここに来たの今日だから家の場所も、家が有るのかも」

「今日つて、じゃあ受験票は?」

「鞄に入つてたの。後は身の周りのものとカードだけ。ケータイもなかつた」

「そうか・・・」

それは凄く心細いだろ?。俺にも経験がある。だからわかる。

俺はあの人達に救つてもらつた。だから今度は俺がこの娘を救う。

「じゃあ一緒に来いよ」

「いいの?」

「お前最初からそのつもりだつただろう?」

「あ・・・えと、あはは。ばれちゃつた?」

「はいはい、行くぞ」

「あー、待つてよー!」

香奈を飛ばした神様は、こうこうこと考えてなかつたんだろうか。俺が助けるとわかっていたのだろうか。それとも・・・。

金が足りず2人で同じ部屋に泊まることになった。同じベッドではない、大丈夫。香奈は同じでもいいと言つたけど、無理です、精神的に無理です。言つてないけど、香奈はかなりの美少女なんだ。二人でなんてとてもとも。

部屋に来てから2人で趣味とか話してたんだが、香奈も2次元に達者だとわかつた。まあ遊戯王やってるくらいだしな。

で今は人も静まりかえった深夜。俺は通信機器を持つて休憩所に来ていた。今日の報告と香奈のことを伝えるためだ。

「一というわけで、うまくいったよ。入学は問題ないって

『そりゃ、じゃあこっちからの手出しひいらねえな』

「うん。それと俺と同じような人を見つけた」

『ん? またアニメだ漫画だとか言つてる奴がいんのか?』

「それはやうなんだけど・・・とにかく俺と回じ世界出身なんだ

『なるほど、待つてる当てるやる。そいつ女だら?』

「やうだけど、どうした?」

『はあー。まあいい氣をつける。で、面倒見てやりたいが、ビルで

も今は誰も手が離せない。しばらく後になるぞ』

「わかった、ありがとう。でも俺もこのままいついで連絡もらつて

アカデミアに行くよ」

『そりそりとこいつにするか。まあ近いうちに誰か行かせるみ

「ありがとう。よろしく頼む」

『あいよ。あと金は口座にあるの好きに使つていってしゃ。たまにはこっちに顔見せろよ。じゃあな』

「わかった。みんなによろしく言つとこ」

これで後は試験の結果を待つだけか。今のうちに服とか小物揃えておくかな。

数日後、無事に2人とも合格が発表された。

おい、デュエルしるよ（後書き）

悠希「今日の最強カードは『ディメンション・マジック』」

香奈「魔法使い族のサポートカード。このカードの効果なら最上級モンスターも召喚できるし、相手のモンスターも破壊できる！」

悠希「効果の影響でスターダストの効果に対しても破壊することができる」

香奈「リリースするモンスターは魔法使い族じゃなくてもいいから靈使いと合わせて使うと強力だね」

香奈「そういうえばオリカあつたけどあれは最強カードじゃないの？」

悠希「極力オリカは最強カードにしないし、あまり出したくない、って作者が」

香奈「とは言つても、何枚かは決まつてゐし、そのうちオリカ主体のデッキも使うらいしけどね」

悠希「大丈夫か？」

速攻魔法『雷刃の導き』

このカードは場に光属性魔法使い族モンスターが存在するとき、手札を一枚捨て自分フィールド上のモンスターを1体を選択して発動する。選択したモンスター以外のモンスターはこのカード攻撃できない。選択したモンスターはこのターン直接攻撃することができる。

悠希「発動条件も緩いし、条件が揃えばデメリットも少ないな」

香奈「アーカナイト・マジシャン系は全て条件を満たすから、単体で5000のダメージとかも夢じやないね」

悠希「それだとアーカナイトの効果が無駄になるから、あんまりオススメはしないぞ？」

第2話でした。

香奈の「デッキは友達の【ジャンド】が原形です。実際にはウォリアーは入ってません。

最初にライブラリアンじゃなくてウォリアーだった場合、攻撃が通ればワンキルです。

ちなみに悠希のデッキは作者の少し前のデッキ【魔力カウンター + 霊使い】です。安定しないのでバラバラにしました。
ではまた次回ノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7485z/>

遊戯王～魔導の力を持つもの～

2011年12月27日21時49分発行